キャラクター名
中辻 弥広

プレイヤー名

シンドローム	エンジェルハィロゥ エンジェルハィロゥ	ワークス	UGNチルドレンB	カヴァー	UGNチルドレン
オプショナル		年齢	16	性別	男
覚醒	生誕	衝動	恐怖	初期侵食率	34 %
出自	天涯孤独	経験	大失態	邂逅	いいひと

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	0	1			1
感覚	6	1	1			8
精神	2	0	0			2
社会	0	0	1			1

HP	24
行動値	18
(非装備時)	18
戦闘移動	23
全力移動	46

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	3		ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	4	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	3	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
グレネードランチャー	射撃	8r+1		9		同じｴﾝｶﾞｰｼﾞ内の敵に攻撃できない。シナリオ中に1回、マイナーを使用して攻撃対象を「範囲」に変更。
	射撃	9r+2		9		ｸﾘｰ-2 ｺｽﾄ4
夜の群れ	射撃	13r+2		29		侵蝕率100↑ ｸﾘｰ-3 ｺｽﾄ8

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

コネ:UGN	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
Dロイス：闇使い	P	N		
戸塚智也	P 誠意	N 不安		
平坂正義	P 連帯感	N 悔悟		
アリエス	P 庇護	N 不安		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 10	残り財産P： 0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
コンセントレイト	2	2						
効果：								
天からの眼	1	2	メジャー			対決		
効果：判定+Lv								
神の眼	1	2	リアクション	至近	自身	対決		
効果：知覚で回避								
リフレックス	2	2	リアクション	至近	至近			
効果：								
マスヴィジョン	3	4	メジャー			対決	100	
効果：攻撃力+Lv×5 シナリオ3回								
闇の指先	3	7	オート	視界	単体	自動		
効果：クリ値+1 ラウンド1回 シナリオLv回								
ミスディレクション	1	5	オート	司会	単体	自動		
効果：判定の直前に使用。対象:範囲、範囲(選択)の攻撃を単体に変更。シナリオLv回								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

「しかし、本当に弥広は人付き合いが下手だよな。」
任務中の移動の際、平坂が口を開いた。先ほどの俺の様子を思い出しての発言だろう。
普段なら情報の引継ぎなどは全て平坂が応じているのだが、そのときは偶々席を外していたので、俺が応対することになった。
「まず、笑顔が気持ち悪い。普段から人と話さないから、顔が固まってるんじゃねえの。」
そう言いながら自分の頬を引っ張るこいつの表情は、山の天気よりも変わりやすく、騒がしい。
だが人と接するということに関しては、俺よりも秀でているというのは確かだった。
俺には友人と呼べる人物は平坂ぐらいのものだし、新しく作ろうとする気もない。
昔は努力したこともあった。うまく言葉が出てこずに、挙動不審な素振りを気味悪がられただけだったが。
人には適材適所というものがあり、子供ながらにそのことを学んだ俺は、接する対象を会話せずに済むものに絞ったのだ。
「俺だってコミュニケーションぐらいとってるよ。ともやもキングもグラットンも俺の帰りを待っていてくれる。」
「誰もお前の馬鹿でかい金魚の話なんかしてねえよ。俺は人間と接しろって言ってんの。」
こいつは了見が狭いところがある。金魚だって同じ生き物のはずなのに、どうして人間だけが特別なのか。
我が家のかわいいBaby達は餌さえ与えれば俺を求めてくれるし、苦手な笑顔を浮かべる必要もなければ、会話を広げる必要もない。
あーあ。俺のシンドロームが人類を金魚にする能力だったらよかったのに。
「弥広は色々と臆病すぎるんだよ。人に嫌われるなんて、ある程度は仕方がないもんだ。」
「そういうお前は積極的過ぎるんじゃないのか。前に潜入した学校でちょっと鬱陶しいって話してた娘がいたし。あとは、戦闘のときとか。」
前半分は冗談も兼ねてのものだったが、後のほうは本心からの言葉だった。
平坂の扱う得物や能力を考慮したとしても、自らを省みない戦い方には、その状況を楽しんでいるかのような節があった。
「俺の戦闘スタイルは弥広のバックアップあってのものだぜ。女の子のほうにもフォローを入れてもらえると、こっちとしては助かるんだけどな。」
そう言いながら、綺麗にウインクを決めてくる。鬱陶しいことこの上ないのだが、俺がやるとこの比ではなく、ゾンビのように顔が崩れて見るに耐えないことだろう。非常に恐ろしい。
「まあ、この後もバックアップは任せたぜ、相棒。」